

「学び」を実感する生徒を目指した授業づくり

提案者 山之内 和孝 宮内 文久

1 学部研究主題設定について（紀要pp. 51 - 57）

(1) 『「学び」を実感する』とは

「实际的、具体的な学習活動への主体的なかかわり（参加）を通して学習によって得たことやその意味、関係性についてその子なりの表現方法（言語化、体験化、表情等）で表現すること」と本研究では定義した。

(2) 『授業における「学び」を実感する生徒の姿』とは

生徒の具体的な姿として、「学び」に向かう姿、「学び」とかかわる姿、「学び」を見つめる姿があり、この姿を目指すことで「学び」を実感する生徒の姿に迫ることができ、生徒の「学び」がつながり、ひろがっていく。

(3) 「学び」を実感する授業づくり

授業づくりの際、各学習過程において「実感ポイント」を設定し、「学び」の三要素を踏まえた手だてを構築し、生徒の「学び」をより確かなものにできるようにした。

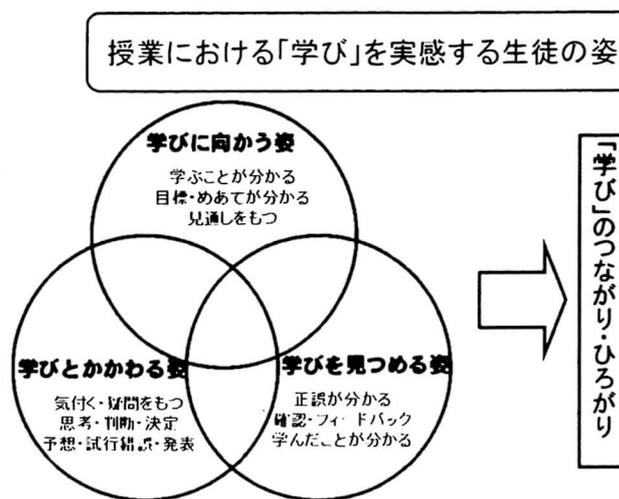


図1 授業における「学び」を実感する生徒の姿

2 研究内容と方法（紀要pp. 58 - 59）

(1) 研究内容

<研究内容1>

「学び」を実感する生徒の姿を探る。

<研究内容2>

「学び」を実感し、「学び」のつながりとひろがりを目指した授業実践を行う。

(2) 研究方法

研究主題を受け、個別の指導計画、発達段階、認知・特性等を踏まえて抽出した二人の生徒を事例対象とし、エピソード記録を基に生徒の変容と授業の成果と課題をとらえる。また、授業場面を広角でビデオ撮影し、録画したVTRを用いて学部職員全員で授業ミーティングを実施する。その中で「学びの印象度チェックリスト」やエピソード記録を活用して本研究で取り組む授業づくりの有効性を検証する。

(3) 研究計画

本研究は、平成21年度～平成22年度までの2年間の計画とする。

3 研究の実際

(1) 研究内容1（紀要pp. 59 - 62）

わたしたちは、日々の授業において、生徒が「学び」を実感する姿を目指すことによって生徒の「学び」がつながり、ひろがっていくと考える。

そのためには、生徒が「学び」を実感する姿をまず明らかにする必要があると考えた。

しかし、その姿は内面の姿であるため、エピソード記録によって具現化を図った。さらに、教師間でエピソード記録の集約と共有化を図ることで、「学び」を実感する生徒の姿を共通理解し、授業実践に生かすこととした。

(2) 研究内容 2 (紀要pp. 63 - 77)

事例として国語Aグループ、体育「グランドテニス」Bグループにおいて、「学び」をより確かなものにするために、学習過程に「めあてを実感」、「学び方を実感」、「学んだことを実感」という実感ポイントを設定し、その実感ポイントに視点を当てた授業づくりを行った。「学び」の三要素と関連付けて、生徒が「実感ポイント」で「学び」を実感できるような工夫をしたことで、意欲や主体性をもって取り組んだり、挑戦したり、気付いたり、試行錯誤をしたりする姿などが見られるようになった。

しかし、各学習過程における「実感ポイント」を重視しながらも、教科の系統性や生徒の発達段階を考慮して指導内容を見直す必要があるなどの課題も見られた。そして、これらの授業実践において、生徒の姿をとらえたエピソード記録を用いることにより、授業改善で用いた「学び」の三要素の具体的な手だてを検討することができた。

また、「学び」を実感する生徒の姿を意識して実践を行ったことで授業改善の視点が焦点化され、生徒の「学び」のつながりやひろがりを促進することができた。

表 1 国語Aグループにおける授業改善と改善後の生徒の姿

実感ポイント	向かう	かかわる	見つめる
	めあてを実感	学び方を実感	学んだことを実感
改善点	導入や課題に取り組む前に、何ができたら目標を達成したことになるのかを、Dさんが理解できる方法や言葉で伝えることで、めあてを意識して、課題に取り組めるようにした。	平仮名の学習をする際に、「①手本を見る②手本を指でなぞる③書く④文字を読んだり、手本の形を見比べたりして確かめる⑤修正する」という一連の流れを繰り返し行うことで、学び方を身に付けることができたようにした。	めあてを確認した上で、Dさんと一緒に手本と書いた文字を比較しながら、できているところと、修正した方が良いところを確認しながら、前時までと比べてできるようになった点を肯定的に伝えるようにした。
Dさんの変容	課題に取り組む際に「今日は(手本)なしで書きます。」や「よく見て書きます。」「ゆっくり書きます。」など、自分の目当てを意識した言葉が聞かれるようになった。	「②手本を指でなぞる」を忘れることがあったが、繰り返し行った学び方の過程を身に付け、自分で行うことができるようになった。	手本と自分が書いた文字を見比べて「ここが惜しかったですね。」や「ここをもっと短くでした。」と、修正点を意識しながら意欲的に修正する姿が見られるようになった。

4 研究の成果と課題 (紀要pp. 78 - 79)

【成 果】

- ・ エピソード記録により生徒の言動や変容を教師間で共有し、生徒の実態を深くとらえ、生徒が他の学習場面でも活用する場面を増やすことができたこと。
- ・ 実感ポイントを絞り込んだ指導方法の協議したり、授業ミーティングのねらいを焦点化したりすることができたこと。
- ・ めあての意識付けを図ることで、生徒自身が学習活動において何を学ぶのかの意識が明確になり、継続も見られるようになってきつつあること。

【課 題】

- ・ 実感ポイントの絞り込みによる、具体的かつ客観的な評価の在り方を検討し、授業の充実を図っていくこと。
- ・ 実感をもって学んだことが、次の授業の「学び」のつながりとひろがりとなる授業づくりを行う必要があること。